とことん聞きたい 安保法制 ②

民主党政調会長代理　辻元　清美氏

命の問題「大げさ」と軽視

つじもと・きよみ　衆院大阪10区、当選6回。護憲派の超党派議員連盟「立憲フォーラム」幹事長。早大卒。55歳。

――衆院審議では質問中に安倍晋三首相から「早く質問しろよ」とやじを飛ばされました。

「あの時、私は自衛隊員が亡くなるリスクについて質問していました。あまり報道されませんでしたが、同じ質問の最中、首相は『大げさなんだよ』ってやじを飛ばしたんです。私はそっちの方が罪深いと思う」

――どう罪深いと。

「彼は痛いところを突かれると反応する。命の問題についての話が『大げさ』ですか。不謹慎極まりないでしょう。『そんな話どうでもいいから俺にしゃべらせろ』っていう態度です。そんな審議の結果、派遣される隊員、その家族はたまったもんじゃない」

――安全保障関連法案の廃案を訴えていますが、最大の問題点はどこに。

「憲法違反。もう一つ言えば、国民を危険にさらすことです」

――政府は「合憲」と説明しています。

「集団的自衛権の行使は認められないというのが、1972年の政府見解の結論です。安全保障環境が変わったからと言って、結論部分だけを変えるのは不可能。集団的自衛権の行使は戦争に自ら参画することであり、『専守防衛』の実態はゴロッと変わります」

――国民も危険にさらされると。

「後方支援一つとったって、戦闘している他国の部隊に弾薬を提供するんですよ。相手には、後方も前方もなく『敵国の一味』と映る。その結果、日本人がテロに狙われることがないと言い切れますか。政府はそういうリスクを一切、国民に説明していません」

――衆院特別委の採決では「委員長、お願いだからやめて」と涙声で反対しましたが、結局は止められませんでした。

「やっぱり数がねえ…。私はね、何とか止めたかった。立法府がこんなものを通せば、後世に憲法違反の片棒を担いだと思われてしまう。もう必死でした」

安倍首相のやじは どう罪深いのですか？

――結果的に、国民理解が進んでいない中で採決を許した形になりますね。

「国民理解が進んでいないというのは違います。進んでいるんです。立憲主義とは何なのかとか、国民も分かっている。法案について理解すればするほど、やっぱりおかしいと思う国民が増えているんです」

――野党第1党として、野党の足並みをそろえられなかったのでは。

「民主、維新、共産の3党が途中から『こんな憲法違反法案の審議に応じられるか』って拒否したら、与党の強引さに対する国民の怒りはもっと高まったでしょう。ただ、そうしようと思っても維新は審議に出たでしょうね。残念です」

――衆院可決後、内閣支持率は急落しました。しかし、攻めた民主党の支持率はほとんど上がりません。

「すぐには上がらないですよ。消えた年金問題を追及した時も、そんなに支持率は上がっていない。でも、支持率のためにやっているわけではないので」

――党の考え方が国民に見えにくいのでは。首相は民主党が対案を出さないことを批判しています。

「対案を出せというなら、10本も改正法案を束ねている今の法案を先に出し直せと政府に言いたい。ばらして出すなら、周辺事態法や国連平和維持活動（PKO）協力法も一本一本、修正部分を提示できます」

――政府や与党は反対一辺倒ではなく、審議に協力する「責任野党」としての対応を求めていますが。

「政権に都合がいいのが責任野党でしょうか。今は国民の不安や疑問を徹底的にぶつけていくことが、野党の最大の責任です」

――民主党政権時代に尖閣諸島沖で中国漁船の衝突事件がありました。民主党が政権をとったら日本を守り切れますか。

「守り切ったでしょう。戦争にならなかったじゃないですか。あの時『何だ中国は！』という対応をしていたら、戦争になったかもしれない。軍事に偏りすぎれば必ず危機を招きます」

（聞き手・平畑功一）